

目的 急速に高齢化社会に向っている現在、衣生活においては既製服が中高年層に広く普及しているにも拘らず、サイズ・デザインなど若年層を対象としたものが中心である。本研究の目的は、女子学生と高年婦人の衣生活に対する考え方や態度の構造をとらえ、両者間の構造を比較検討し、高年婦人の衣生活のあり方に対する指針を得ることである。

方法 衣生活に関する質問300以上の項目から、同調的、探究的、感性的、社会的、経済的、美的の6つの指標を想定した40項目を選定し、女子学生は女子大学・短大の学生を対象として集合調査法で調査を行い、有効回答210名を得た。一方、高年婦人としては東京都内の60才以上の婦人を対象として、個人面接法及び配票留置法で調査を行い、有効回答135名を得た。結果はそれぞれ因子分析によって類型化し、両者間について比較検討を行った。又、流行に対する態度など5項目、年齢などの基本属性9項目も合わせて調査した。

結果 女子学生、高年婦人それぞれ累積寄与率が50%を占める10因子について、バリマックス回転後解釈を行った結果、前者では流行意識・採用に関する因子、品位・年齢と着装に関する因子など、後者では年齢意識と同調性に関する因子、衣服の選択に関する因子などが抽出された。これらの因子をもとに女子学生と高年婦人の衣生活態度を検討してみると、例えば、女子学生においては流行を意識する傾向がより強く、品位と服装は関係があり、年齢にこだわる必要があると考えている傾向がみられる。他方高年婦人においては老後の服はあまり目立たない、人となるべく同じ服装をし、より質素にと考え、衣服の選択も慎重に行う態度が表われている。